

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 5 月 31 日現在

機関番号：23803

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2010～2011

課題番号：22652066

研究課題名（和文） 戦時・戦後期における啓蒙運動とメディア

研究課題名（英文） The Enlightenment movement and media in wartime and occupied era

研究代表者

森山 優 (MORIYAMA ATSUSHI)

静岡県立大学・国際関係学部・准教授

研究者番号：60295566

研究成果の概要（和文）：戦時・戦後（占領）期に出版された印刷紙芝居の全貌を把握するため、残存する紙芝居の収集作業を実施した。調査したのは、掛川市内の篤志家の遺族宅に保存されていた印刷紙芝居 192 点、大阪国際児童文学館の印刷紙芝居 113 点、名古屋柳城短大所蔵の印刷紙芝居 43 点等である。また、当時の雑誌『教育紙芝居』『紙芝居』を調査し、記事目録と紙芝居の目録を作成した。上記調査と総合し、戦時期については、ほぼ全容が解明できた。

研究成果の概要（英文）：We have collected remained Kamishibai for the purpose of understanding the publishing conditions of printed Kamishibai in wartime and occupied era. We have researched 192 of printed Kamishibai which are reserved at the residence of charitable man in Kakegawa city, and 113 of printed Kamishibai at International Institute for Children's Literature, Osaka, and 51 of printed Kamishibai at St. Mary's college, Nagoya etc. We have also researched two journals and have completed the lists of articles and printed Kamishibai. We have integrated these above data, we uncovered the publishing conditions of printed Kamishibai in wartime.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2010 年度	900,000	0	900,000
2011 年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
年度			
年度			
総計	1,700,000	240,000	1,940,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学・日本史

キーワード：日本近現代史 メディア史 社会運動史 近代日本文学史 言論統制 戦時体制

1. 研究開始当初の背景

紙芝居そのものに対する文献は、紙芝居作家であった加太こうじ『紙芝居昭和史』（立風書房、1971）が先駆的な著作である。他に先行研究として、言論統制史の観点から位置づけを試みた鈴木常勝の『メディアとしての紙芝居』（久山社、2005）、同『戦争の時代ですよ』（大修館、2009）や、連合軍の占領期文書を中心に分析した山本武利『紙芝居-街

角のメディア』（吉川弘文館、2000）等が有名である。

これらの研究によれば、紙芝居は戦時期に入って大きく変質を遂げたとされる。当局の検閲が厳しくなり、上演中にト書きを改変することも原則的に禁止されたというのである。そして、紙芝居作家が細々と作っていた紙芝居そのものも、官製の印刷紙芝居（文部省や陸海軍推薦のお墨付き）に圧倒されてい

ったと総括されている。

先行研究に共通して指摘できる問題点は、分析対象である紙芝居そのものの量的な不足である。敗戦に伴い、出版社が保存していた軍国調の紙芝居は、原版が慌ただしく廃棄されたとの証言も残っている。紙芝居を収集・公開している機関は、大阪国際児童文学館や名古屋柳城短期大学図書館など数えるほどしかない。鈴木前掲書のように、研究者が紙芝居をひとつひとつ確認して研究している段階であった。どれだけの紙芝居が存在し、どのように上演されていたか、という基礎的な部分についても、出版部数や検閲の統計はあるものの、充分とは言い難い。

ところが、静岡県篤志家の遺族宅に、戦中から戦後にかけての印刷紙芝居が大量に保存されていることが明らかになった（以下、収集者の名前を借りて「浦上史料」とする）。このため、前記の施設のコレクションとあわせれば、包括的な研究の実現の可能性が出てきた。

2. 研究の目的

従来、思想史では戦後民主主義と対になる「戦後啓蒙」という理解が一般的であった。これは勿論、戦前・戦中と戦後の断絶を前提としている。しかし、1980年代後半から、歴史研究全般において、戦時・戦後の連続性を強調する議論が展開されるようになってきた。思想史でも、国民生活と国家的・社会的価値を結びつけて理解させる「戦時啓蒙」と呼ぶべき国民教化のシステムが既に戦時期から成立していたという指摘も、なされている（有馬学「戦争と啓蒙-〈政治〉史と〈思想〉史の架橋」『九州史学』第150号、2008）。つまり、戦後は啓蒙の内容こそ異なれ、システムは大なる変更を加えられることなく、そのまま展開して行ったというのである。このような観点からすれば、まさに戦後につながる「戦時啓蒙」の先兵の一つとして位置付けられるのが、印刷紙芝居というメディアであった。

本研究では、印刷紙芝居を、メディア史、政治史、地域史、国文学等のさまざまな観点から再検討し、新たな位置づけを試みることをめざした。

3. 研究の方法

まず、(1)素材である紙芝居そのものの収集、それから(2)当時の出版状況全体の把握が必須となる。さらに、一定のデータを収集した後に(3)分類作業、(4)比較検討作業、(5)総合評価、という順で展開するという計画を立てた。このため、研究協力者が集まって問題点を検討する研究会を開催する。

(1)収集作業 現物を市場で購入することは、限られた予算では困難なため、デジタル

カメラによる複写作業を中心に、画像データの形で収集する。篤志家の御遺族には、研究協力者の力をお借りして、調査に便宜をはかっていただく。

(2)出版状況の確認 加えて、印刷紙芝居の出版状況を把握するため、当時発刊されていた雑誌の記事や広告などから、題名、内容、枚数等の基礎的なデータを収集する。これらは集計に便利のようにエクセルファイルに入力され、研究協力者に共有される。

(3)分類作業 先行研究にならって、テーマ別に紙芝居を分類することを試みる。

(4)分類作業の成果を利用し、

(5)総合評価を試みる。

4. 研究成果

(1)収集作業

①篤志家宅に保存されていた紙芝居（「浦上史料」）の撮影作業（2010年度）

ご遺族のご理解と掛川市民図書館のご協力（調査・撮影場所の提供）を得て、史料を借り出し、192点の印刷紙芝居を確認した。研究分担者・研究協力者の協力のもと、数次にわたる調査を実施、デジタルデータ化を完了した。

②名古屋柳城短期大学図書館所蔵の紙芝居撮影作業（2010年度）

名古屋柳城短期大学図書館のご厚意により、51点の印刷紙芝居を撮影・デジタルデータ化した。

③大阪国際児童館の紙芝居（2010・11年度）

大阪国際児童館の印刷紙芝居113点を確認した。当館ではデジタルカメラによる撮影が許可されなかったため、著作権法の範囲内でカラーコピーすることで、若干の点数を収集した。

④北海道市立図書館の紙芝居（2010年度）

1945年の敗戦直前に発行された紙芝居が1点保存されていたので、撮影した。

(2)印刷紙芝居の出版状況の把握

上記のような現物確認の作業は研究を進める前提として当然のことだが、これらを集計しても、出版統計にみられる出版数とは大きな開きがあった。このため、どのような印刷紙芝居が出版されていたかを把握するため、

①先行研究に引用されている紙芝居の目録化（2011年度）、ついで

②当時刊行されていた雑誌『教育紙芝居』、『紙芝居』（日本教育紙芝居協会。早稲田大学演劇博物館所蔵）からのデータ収集、を実施した（2011年度）。

後者は、まず記事目録を作成し、さらに記事や広告等に掲載されている紙芝居の情報を可能な限り幅広く抽出した。

これらの作業の結果、1938年から1952年までに出版された紙芝居の点数は、データが

判明しているものだけで約 800 件であった。しかし、データ源とした雑誌『紙芝居』には欠号があり、戦時期の分は 1944 年 8 月号までしか保存されていない。このことも一因だろうが、現物が残存している紙芝居の中に、雑誌『紙芝居』に掲載されていないものもある。さらに、戦後の出版状況を知るには、(年度内には実施できなかったが)戦後に復刊された雑誌『紙芝居』(日本紙芝居協会。国立国会図書館所蔵)の調査が不可欠である。このため、1945 年までに時期を限定して分布を調べたのが、次頁の表である。確認できた件数は 670 件、出版社別に集計すると、日本教育紙芝居協会が 406 点と約 6 割を占めている。これは、鈴木 2009 での 1942 年における割合(全 295 点中 160 点)と近似しており、概ね首肯できる数字である。

年	計	全甲社	大日本画劇	日本教育紙芝居協会	その他
1938	6	4	2		0
1939	9	4	2		3
1940	123	10		105	8
1941	173	6	18	137	12
1942	158	15	23	99	21
1943	126	5	12	32	77
1944	64	1	14	24	25
1945	11		4	6	1
計	670	45	75	406	144

(3)「浦上史料」の位置づけ

当時の紙芝居の出版状況が、ある程度判明したため、「浦上史料」の史料的な意味も若干の考察が可能となった。

「浦上史料」の紙芝居のうち、敗戦(1945年8月)までの紙芝居は 99 点だが、その中で「浦上史料」にのみ存在するもの(他に存在を確認できないもの)は、28 点である。大阪国際児童館の紙芝居では同様のものが 13 点(もともと、既に研究者に利用・引用されているため、単純な比較はできないものの)、名古屋柳城短大は 5 点であり、これと比較しても、きわめて貴重な史料群であることが理解される。

それから、重複する紙芝居でも、発行日が異なるもの(二版・三版など、特段の表記がないにもかかわらず)、色使いが異なるものがあり、書誌学的な分析が必要なことも明らかとなった。

(4)作品研究

紙芝居の作品そのものについては、1980 年代頃から、その戦争協力的な内容について、

批判的な指摘がなされてきた。このことは、紙芝居に携わった作家・画家たちが、戦後も戦前と同じように活躍してきたという人的な連続性の事実に加え、戦争協力に対して敗戦直後に何らの反省もなされなかったという「戦争責任論」的な批判が、この時代になって起こってきたことを意味する。確かに、文壇や画壇、そして音楽界では、敗戦直後に戦争協力者と目された者たちが糾弾された。しかし、加太 1971 が示すように、紙芝居界では、そのような動きは起こらなかった。むしろ、新日本の建設のための啓蒙のツールとして、積極的に紙芝居を利用しようとしたのである。このことが 1980 年代以降の批判の背景にあった。

問題は、「1. 研究開始当初の背景」で指摘したように、研究の素材である紙芝居が量的に不足しており、そのために史料に即した実証的な研究が難しかったところにもある。もちろん、現状でも、確認できた紙芝居の数は、重複分を除けば 173 件と全体の 1/4 程度に過ぎない。とはいえ、サンプルとしては、格段に状況が改善されたため、下記のような分析軸で、それらの内容を把握することを試みた(2011 年度)。

①作品の類型化

まず、大分類として A 創作、B 既存、C 説明の三つに分け、時代、場所、主要人物、ト書き指示の有無、の指標を設定し、作業を開始した。これらの作業の過程で、研究会を開催し、研究協力者との意見交換を実施した。分類の過程で発生した疑問点を議論した結果、当時の分類も参照にした方が建設的であるという結論に達し、雑誌『紙芝居』で使用されている分類(種別)の集計結果を待つこととした。

2011 年度末までに作品目録自体は完成したが、当時でも分類が付されていなかったり(分類されているものは半数程度)、途中で変更されたものもあり、客観的な指標としては利用が困難なことも明らかとなった。たとえば発売当初は「国策」に分類されていたも、途中から「貯蓄」や「常会・一般・和楽」に変更されていたりするものが非常に多い。その理由を考察すると、雑誌『紙芝居』における作品目録の「種別」は、いわばカタログのような性格が強かった。つまり、読者の注文のための指標であり、当時一般的に言われていた(そして、雑誌『紙芝居』でも認めるとおり)「国策」ものは面白くないという評判が定着してしまっていたとしたら、販売上の障害にすらなってしまう。むしろ「国策」色を薄める必要があったとすら考えられる(これに比較して、官公庁が発注した紙芝居は、印刷した分がそのまま買い上げられるため、そのような心配はない)。また、仮に分類されていたも、作品が発する最も大きなメッセ

ージが、その「種別」におさまるかどうかは、現物を検討しない限りわからない。このため、当時の「種別」を参考にしながら、実際に紙芝居ひとつひとつを丹念にあたっていくことが最も有効な分類方法であろう。

もちろん、大ざっぱな分類は可能である。当時の印刷紙芝居は、六割以上が大人向けであった。裏返せば四割弱が子供向けということになる。これは「種別」では「教材」や「幼児」ということになる。また、大人向けの国策紙芝居でも、いわゆる解説ものは主題が明確である。戦時期の貯蓄奨励、衛生観念の向上などは、その一例であり、これらは戦後の啓蒙紙芝居へとそのままスライドして行っている。



貯金局指導『銃後貯金だより』1941



農林省監修『農地委員会』1947

また、川崎大治の農村紙芝居のような作品は、時局に左右されることなく一貫して農村を題材に扱っている。



川崎大治『狼の裁判』1947

このような例は、戦時・戦後の連続性を考察する上で、重要な座標となり得るだろう。

②台詞部分の分析

戦時、戦後において、どのような台詞や言葉が使われているか、計量分析すれば一定の傾向性を浮かび上がらせることも可能となる。2010、2011年度に、試験的に若干の紙芝居をテキストデータ化したのが、1作品あたり5000字ちかくあるため、予算の関係から、悉皆的な分析は不可能であった。他日を期したい。

(4)作家研究

先行研究が薄いフィールドである。数少ないそれは、ほとんどが雑誌『教育紙芝居』『紙芝居』に史料的に依拠している状況である。作品目録が完成し、作家ひとりひとりの創作の軌跡を追うことが可能となった。今後の進展が期待される。

※今後の展望

史料収集とデータ処理という作業的な部分が2年間の研究の中心となったため、内容を詳しく読み込むレベルには至らなかった。また、政治史的・地域史的アプローチも、あまり進展しなかった。このような反省も踏まえ、今後を展望すれば、以下のような可能性が考えられる。

・内容の精査の必要性

収集した紙芝居の題名を眺めていると、それ自体が時代を象徴していることが容易に読み取れる。それでは、戦時期の日本は、国策を奉じて一心不乱に突き進んでいたのだろうか。実はそうとも言い切れない。もちろん、「軍神もの」と分類されるような戦時期そのものといった作品は数多く出版された。それらの中には、好評を博したものがあつたのも事実である。しかし、このような忠君愛国一辺倒の紙芝居が、当時の国民に、どれほど浸透したのだろうか。「国策」ものはつまらないという批判、この紙芝居は「国策」ものとは違い楽しい内容という宣伝文句、戦場を題材とした紙芝居は言葉が難しすぎるため子供には無理といった感想は、当時から雑誌『紙芝居』の誌上に散見される。

内容があまりに「国策」一辺倒では、逆に観衆の自発性を喚起することが難しかった。一見、「国策」イデオロギーそのものの題名でありながら、内容を検討してみると、即していないものもある。こういう意味からも、標題からのみ作品の傾向を判断することは、困難である。

たとえば、幼児向けの作品でも、時局批判と読むこともできる作品がある。さらに、時局に阿らない完全な娯楽作品を出版することも、一つの見識である。

・さらなる史料収集と整理

研究年度終了直前に、昭和館が『特別企画

展・昭和の紙芝居 戦中・戦後の娯楽と教育』の展示を開始した。そのなかで、昭和館が多くの紙芝居を所蔵していることが判明した（現在ほとんどが非公開）。このため、所蔵史料の確認、可能であれば撮影等のデータ収集が必要である。昭和館は会場では500点を所蔵していると発表していたが、会場に設置されたパソコンでアクセス可能な紙芝居は126点であった。うち53点が、これまでの研究や本研究での作品目録では確認できない紙芝居である。今後の調査に俟ちたい。

・対象期間の重点移行

2010、2011年度では、調査対象の重点が戦時期に偏りがちとなり、若干の積み残しを生じた。当初の目標でも掲げていたが、占領期における出版状況については、現物が残っているもののみがフォローされている段階である。これを、より完全なものに近づけるには、先述した雑誌『紙芝居』（日本紙芝居協会）の調査が不可欠である。

幸い、本研究の意義が代表者の所属研究機関で認められ2012年度の「教員特別推進研究」費を獲得することができた。既に、上記の昭和館調査などで、着々と進展中である。これらの成果の一部は、静岡県立大学『国際関係・比較社会文化研究』11-2（2012）に掲載する予定である。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔学会発表〕（計2件）

北原勤「浦上喜平・紙芝居・集団疎開児童」
森山優「「啓蒙」のツールとしての紙芝居 ―印刷紙芝居の全貌把握作業を中心に」第49回九州史学研究会近現代史部会（2012年3月24日、九州大学）

6. 研究組織

(1) 研究代表者

森山 優 (MORIYAMA ATSUSHI)
静岡県立大学・国際関係学部・准教授
研究者番号：60295566

(2) 研究分担者

鈴木 さやか (SUZUKI SAYAKA)
静岡県立大学・国際関係学部・講師
研究者番号：10448699

・研究協力者

北原 勤 (KITAHARA TSUTOMU)
藤枝市史編さん専門委員

清水 実 (SHIMIZU MINORU)
静岡県立藤枝東高校教諭

山空 誠 (YAMAMOKU MAKOTO)
静岡県立科学技術高校教諭

村瀬 隆彦 (MURASE TAKAHIKO)
静岡県立掛川西高校教諭